

Title	キャンパスにおける礼拝、その充実：チャペル完成を目前にして
Author(s)	阿部, 洋治
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume21, 2006.3：140-145
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3235
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

キャンパスにおける礼拝、その充実

——チャペル完成の恵みを受けて——

阿 部 洋 治

一、「聖学院大学の理念」に触れて

「聖学院大学の理念」 1 本大学は、プロテスタント・キリスト教の精神に基づき、自由と敬虔の学風によって、真理を探究し、霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め、人類世界の進展に寄与せんとする者の学術研究と教育の文化共同体である。 2 本大学は、プロテスタント・キリスト教の伝統に則してなされる礼拝を生命的な源泉とする。礼拝においては、聖書と宗教改革が証しする福音が語られ、そこから大学共同体にとっての生命である研究と教育のための自由と責任、および伝道への活力、さらに本大学の伝統を継承し新たに創造する喜びと熱意とが与えられる。 3 プロテスタント・キリスト教は、特に近代世界の成立と展開に独特な貢献を果たしてきたが、それゆえまた、現代社会において固有な責任を負っている。本大学は真剣な学術研究と生きた教育、霊的強化を通して、このプロテスタント・キリスト教の現代文化に対する責任という世界史的課題を大学形成において遂行し、希望ある世界の形成に寄与せんとする。

「チャペル完成の恵み」を覚えつつ、「聖学院大学の理念」の基本を確認したい。第二項は、礼拝が本学の教育の「生命的な源泉」であるとしている。従って、「チャペル完成の恵み」は「生命的な源泉」としての礼拝の場が確保されたことにある。しかし、注意したいことは、礼拝を保証するものは建築されたチャペルの壮麗さではない。「聖学院大学の理念」の第二項は、礼拝の内実を形成するものが「聖書と宗教改革者によって証された福音」であるとしている。礼拝が「生命的な源泉」となるのはここで語られる「福音」によるのである。福音が語られる礼拝こそが、第一項で述べられている「霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成」を可能にする。

ところで、「聖学院大学の理念」がうたう「霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成」の課題は、これまでのキリスト教教育においては曖昧にされあるいは看過されて来た課題といわなければならない。この意味で私たちは、後発のキリスト教大学として、この点において自覚と自負とをもって取り組んで行かねばならないと思う。

二、先人の取り組み

(一) 新島襄

「同志社大学設立の旨意」(明治二年一月)

「その経緯にふれた後」斯くの如くにして同志社は設立したり、然れども其目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尙ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき、而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、又た既に人心を支配するの能力を失ふたる儒教

主義の能くす可き所に非ず、唯上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道德に存ずることを信じ、基督教主義を以て德育の基本と為せり、吾人が世の教育家と其趨を異にしたるも茲に在り（以下略）」（『新島襄全集 1』一三〇頁）。

（二）井深梶之助

「（前略）然るに、独り我が国の風俗に至りては、依然として進まざるのみならず、却つて日に月に退歩せんとする勢あり。人情は浮薄に流れ、上下交々利を争ひ廉恥の風衰え、自由の意を誤解して私欲を縦にし、権理の義を誤認して不尊不礼に誇るの氣風雨行われ、其の他名状するに忍びざるの惡習あるは今更に弁ずるに及ばず。皆人の熟知する所なり。外面の開化は日に進歩するも、人民の道德増す退歩せば如何。之を眞の文明と云うべき乎。爰に一個人あり。天資英敏ならざるに非ず、學識なきに非ず、雄弁ならざるに非ず。然れども、其の品行を視るに心術卑劣にして、名利の爲には如何なる惡事をも厭わず、詐偽以て人を欺くを悦び、淫逸にして放蕩至らざる所なし。（中略）智徳兼備の人にして眞正の人と云うべき也。（中略）一國民に於けるも亦然り。其の知識開發するも智徳並び進むに非ざれば、決して眞正の文明国とは云うべからず。然らざれば、其の知識は却つて惡習の媒酌となるべし。思いて此に至れば、大長息せずんば非ざる也。然れども、我が輩は徒らに其の頽廢を嘆息して傍觀すべからず。」（『日本道德之基礎』『植村正久とその時代』1卷、五一六頁）

（三）新渡戸稲造

「我政府が教育上に於ける施設の多大なること否むべからず。明治年代の教育法は、維新前の教育法を繼承せるものに非ずして、全く新軌道を取れるものなれば、其事業の宏大なることも亦否むべからず。此新教育制度の成功の量の大なることも、亦た否むべからず。されど吁其成功や過ぎたり矣。今日の教育たるや、吾人をして器械たら

しめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪ひぬ。一言にして云わば、これぞ我祖先が以て教育の最高目的となしたる、品性てふものを、吾人より奪ひ去りたるものなる。知識の勝利、論理の輕業、あやつり、哲学の煩瑣纖微、科学の無限なる穿究、此等は只だ吾人を変へて、思考する器械たらしむに過ぎざるものなりとせば、畢竟何の益がある。フリーベル及びヘルバルドの教育法も、若し此等が吾人の目にある眼鏡に過ぎずして、活ける器関たらずば、果たして何の利する処がある。」（『我が教育の欠陥』『随想録』一九〇七）

以上、いずれの場合にも、キリスト教に基づく道德教育あるいは人格教育に力点を置いている。こうした傾向は後の時代の指導者においても変わりない。安井てつ（東京女子大第二代学長）も、日本の教育が形式に囚われている点が多く、また知的教育に偏しており、人間としての教育を軽んじる傾向がある点を指摘して、キリスト教に基づく人格教育を強調している。あるいは、市村与一（金城学院）は、一九三四年（昭和四年）七月二六、三〇日の基督教教育同盟夏期学校の主題講演で、キリスト教教育こそ真の教育であることを強調し、「聖書によって人間性を開拓しなければ、即ち神の前に各自の使命を自覚せしめ、全力をあげてその実現に努力する点に教育が発見しなければならぬ」と述べている。

三、今日のキリスト教学校が直面する課題

先人が警鐘を打ち鳴らしつつ示唆したキリスト教教育の課題と方向が過去のものとは思わない。けれども、今日の教育は、道德教育も人格教育も成り立ち難い深刻な問題に直面している。それは靈的次元の問題である。根本的には罪の問題である。自己の欲望の奴隸（ローマ六・一七）となり、自己を肯定できず、自己の存在の意味を見出

しえず、生きる力を喪失している。自己を支え、自己を生かす靈的な支えを喪失している。聖書的に言えば、罪の故に「神の栄光を受けられなくなっている」(ローマ三・二三) 状態であり、「命の息」が吹き入れられる前の「土のちり」としての姿(創世記二・七)、あるいは、エゼキエル書的に言えば、「枯れた骨」の姿である(三七章)。

「聖学院大学の理念」は上に示唆したように、こうした靈的次元の問題との取り組みを目指している。しかし、それは、我々の教育的力量に依存する教育ではなく、礼拝における福音の力に依存する教育を示唆している。創世記二・七は人を生かす「命の息」、エゼキエル書も枯れた骨を再び生かす預言の言葉を示唆している。ローマ人への手紙は、「すべて信じる者に、救いを得させる神の力」としての「福音」を示唆している(一・一六)。それは、私たちを神の前に立たせ、罪を赦し、神の前に平安を得させる力である(ローマ五章一節以下)。

「聖学院大学の理念」が示唆する礼拝は、そのように人を生かし支える福音が指し示される場である。従って、通常期待されているような、宗教的情操を涵養するための場ではない。若人が福音の息吹に触れ、彼らの魂が神との交わりへと回復される礼拝でなければならない。

四、福音に生きる共同体の形成

「聖学院大学の理念」が「聖書と宗教改革が証しする福音」という時に見ているものは、常に新しく福音によって生かされなければならない人間の姿である。聖書に聞き、真実に宗教改革の伝統に生きる礼拝には、もはや福音を必要としないほどに聖人に達したと主張できる者はいない。ルターは記している。「私たちの主であり師であるイエス・キリストが、『悔い改めよ……』(マタイ四・一七)と言われたとき、彼は信する者の全生涯が悔い改めで

あることを欲したもうたのである」(『九五ヶ条の提題』第一条)。パウロも罪の惨めさの中で次のように叫んでいる。「わたしは、なんというみじめな人間のだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ七・二四)と。彼は、さらに次のようにも記している。『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は、確實で、そのまま受け入れるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである」(第一テモテ一・一五)。

この意味において福音に耳を傾けつつ神を礼拝するとき、私たち教育者は、さまざまの課題を背負っている学生たちを断罪する立場にはいない。むしろ、パウロがそうであつたように、私たちも自己の惨めさを知って叫ばなければならぬ。従つて、ここでは、教育者は、学生を上から導くものとしてではなく、人間として彼らも背負っている同じ課題を彼らに先んじて取り組む者として礼拝する。言い換えるなら、聖学院大学の礼拝は、学生に神礼拝を強いる場所ではなく、そこに集う者が自らの足りなさを慰められ力づけられる場所でなければならない。そして、聖学院大学の教育は、ここでの慰めと力を指し示す教育でなければならない。「靈的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成」は、福音が語られる礼拝における可能性なのである。

(二〇〇五年二月二十四日、全学礼拝懇談会)